昭和60年７月

くすり博物館だより

〒483　岐阜県羽島郡川島町・内藤記念くすり博物館・*Phone: 058689-3111*

第15号

特別展

植物にみる先人の知恵

●昭和60年７月27日～10月31日
●内藤記念くすり博物館
３Ｆ展示場

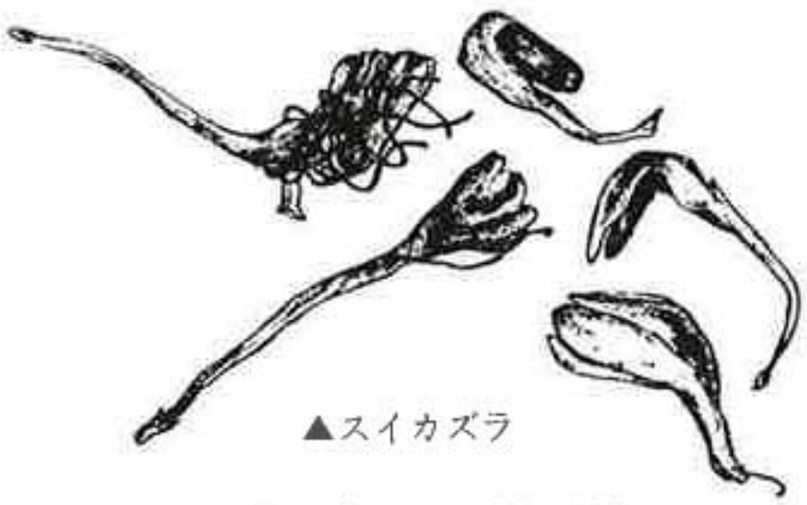
人類は長い歴史の中で，経験によってさまざまなことを発見してきました。私たちの身のまわりには，そんな“生活の知恵”があふれています。その中から植物にまつわるものを展示しています。ご家族で一度，見学にお出かけください。

※薬用酒

薬草を刻み，煎じて飲むばかりでなく酒に浸すのも先人の知恵。植物中の成分によっては，水に溶けなくとも酒に溶けるものもあります。薬用酒と同様に植物をアルコールに浸したものはチンキ剤といい，医薬品として用いられています。

そもそも酒は昔から重要な健康促進飲料です。医薬神はよく，酒の神としても祀られています。

中国の故事に「酒に十の徳あり」とありますが，十徳とは，①百薬の長，②寿命を延ばす，③旅行の食，④寒気に衣代り身体を暖める，⑤訪問時の手土産，⑥愁を掃う，⑦位なくして貴人に交わる，⑧労働を助ける，⑨万人と和合できる，⑩独居の友となる，ということです。


▲スイカズラ

しかし，薬用酒の製造が法律で許可されるようになったのは近年のことで，昭和36年に初めて梅酒が，そして翌年ナツミカン，イチゴなど新たに12種の果実の製造許可がおりました。ブドウ酒を除くすべてのものが許可されたのは昭和46年のことです。それまでは密造酒として禁止されてたわけです。

酒は百薬の長ですが，百毒の長にならぬよう，ほどほどに。

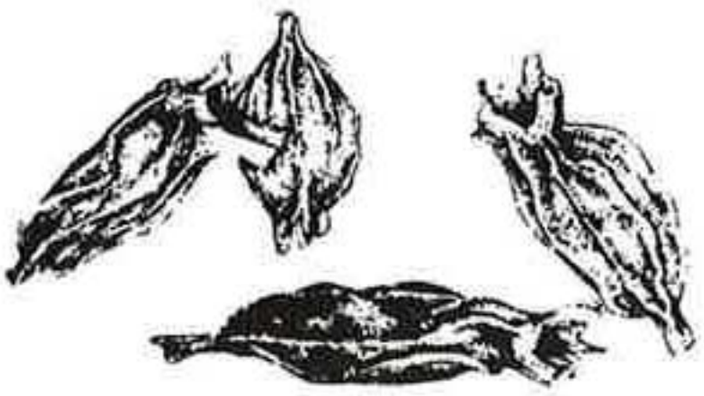
トウキ，サフラン，コク，ビワなど疲労回復，強壮の効のあるものを中心に15種類，展示しています。

※食物に添えるもの

刺身に青ジソを添えたり，カレーに色づけをしたりするのにも大切な意味があります。防腐や，食欲増進などの目的で使います。

竹（あるいは笹）も大切な“添えもの”です。酒の中に入れたり，笹団子，笹飴，バッテラなどを包んで防腐剤として使います。

竹は年中，青々としていたり，筍の生長には驚かされる（モウソウチクの筍は１日に1.2m伸びる）ことから，生命力ある植物として信仰の対象にもなってきました。防腐のために使われ出したのも，そんなところが始まりかもしれませんね。


▲クチナシ

❀植物から作る医薬品

化学の進歩に伴い薬草の有効成分の探索が始まりました。1806年ドイツの薬剤師ゼルチュルネルが鎮痛剤アヘンから，モルヒネを分離しました。これが最初の植物成分の発見です。日本では1885年長井長義が，ぜ

◀ニチニチソウ

んそく薬マオウからエフェドリンを発見しています。このように数多くの植物から有効成分が発見されています。

薬草は品種，産地などによって薬効に多少のバラツキがあり，貯蔵や輸送の面でも不便です，しかし，その有効成分を結晶として分離抽出することによって，安定した効力が保証されることになりました。

さらに分離抽出した結晶に他のものを結合することによって，より優れた医薬品を産み出すことも可能になりました。

❀染　色

私たちの生活から色がなくなってしまったら……!?　色は私たちの生活と密接に結びついています。植物を使って染色するのも先人の知恵です。

草木の汁を摺りつけたことから始まった染色も実は薬と密接な関係にあり，キハダやクチナシなどの古代染料のほとんどが薬草です。これは薬として煎じた時の汁を利用したのだと思われます。

世界で，最初に作られた合成染料とされているモーブは，1856年，パーキン（英）によって作られました。これはマラリアの薬キニーネを合成しようと実験したところ偶然に発見されたものです。その後，大量生産可能な合成染料が植物性染料にとってかわりましたが，天然のものは微妙な色あいを出せるため，植物性染料も，また見直されてきています。

アカネ▶

❀歳時記の中の植物

四季折々に行なわれる年中行事は健康を祈ったものが数少なくありません。その中で植物を使って病気よけをするものも多くみられます。臭気の強いものやトゲのあるものなどは，特に病魔退治の力があるとしてよく使われます。あるいは古くからの伝承で長寿薬とされている植物もあります。年中行事の中の植物を見直しながら，季節の草花を楽しんでみてはいかがでしょう。

⊙このほか民間薬や，薬用植物画譜，薬用植物切手も展示しています。植物を使ったおもちゃのコーナーもあります。よく見て家で作りましょう。

薬草園配植図（展示関連植物）

			センキュウ			
サイカチ			トウキ		ムラサキ	
イチイ			トウガラシ	ワタ		
ドクダミ			サボンソウ	チョウセンアサガオ		
			アマチャヅル	ゲンノショウコ	ナガイモ	
				ウコン		
			ハトムギ	エビスグサ、ハブソウ	キキョウ	
カノコソウ						
ツワブキ	ウメ				アカジソ	
					アオジソ	
ニンジン		ナンテン		ヒロハセネガ		
		クコ				
		サンショウ	ジギタリス	オオバコ	トウゴマ	
		アサクラザンショウ		アイ	ダイオウ	
		ナンテン	サフラン			
ユキノシタ	ヨモギ	シロナンテン	ステビア			
サンシュユ	キハダ			オケラ、ベニバナ	シロバナムシヨケギク	
			染料植物	香料植物		

話題の植物

ふれあいコーナー

入口

くすり事始(21)

世界で最初の全身麻酔

華　岡　青　洲

大きな外科手術は全身麻酔で眠っている間に痛みもなく行なわれどんなにか助かっていることでしょう。その全身麻酔を世界で最初に行なって乳ガンの手術をしたのが華岡青洲です。文化1(1804)年のことで，エーテルによる麻酔が1842年(米)，クロロホルム麻酔が1847年(英)ですから，30数年も早いわけです。

青洲は宝暦10(1760)年，紀州の医家に生まれ，23歳の時京都に出て3年間，古医方，外科学を学んでいます。

彼が考案した麻酔剤はキチガイナスビとも言われる毒草のマンダラゲ(チョウセンアサガオ)，矢毒に用いられる草ウズ(トリカブト)を主剤とした6種類の薬草が配合されたものです。その配合比など研究する過程で母親や妻が実験台となり，妻の加恵さんが失明したということです 。

この麻酔剤・通仙散を用いて乳ガンの手術に成功したことが知られ，全国から入門者が相次ぎました。乳ガン姓名録には31年間に156人の名が出ています。

▲晩年の華岡青洲

◀華岡流手術図

しかし，このすばらしい発見である全身麻酔法は，秘伝としてごく限られた人にしか公開しなかったため，広く普及しませんでした。誠に惜しいことでした。

くすり博物館には入門の控，乳ガン手術図，華岡流手術道具，各種腫瘍図をはじめ華門秘録，春林軒丸散録，膏薬方，門人姓名録などが収蔵され，展示されています。

薬草豆知識

ウコン

熱帯アジア原産といわれ，熱帯各地で栽培されるショウガ科の多年草で，太くて大きな根茎は黄色ないし澄黄色で芳香があり，健胃・利胆薬とされますが，主な用途はカレー粉の原料です。

カレー料理に欠かせないスパイス

カレー料理に用いるカレー粉には10数種のスパイスが混ぜあわせてあり，最上級といわれるものには50種も使われているようです。インドでは家ごとにカレーの味が微妙に異なると聞きますが，スパイスの配合の仕方でその家独特の味をつくっているようです。このカレー粉に欠かせないものが，ウコンです。

お赤飯ならぬ黄飯の着色料

カレー料理のほか，布の染色，食品の着色にも用います。ビルマのお坊さんが身にまとっている澄黄色の布地はウコン染めによるといわれています。またインドネシアでは結婚式や割札の祝事のとき，たくさんの料理や菓子を用意して近隣の人びとを接待しますが，やはり欠かせないのがウコンで黄色に着色したご飯です。

▲秋になるときれいな淡黄色の花を咲かせます。

この黄飯はよい香りがあり，慣れるとおいしいです。

ウコンに含まれているクルクミンという黄色素は安全な食品着色料として，たくあんなどの漬物にも利用されています。デパートやスーパーのスパイスコーナーではターメリック(英名)の名称で市販されています。

(薬用植物園　白井英夫)

新収蔵資料

◎カールバウム社試薬

東京大学薬化学教室に伝わるカールバウム(Kahlbaum)社試薬が寄託されました。

大正12年，関東大震災で東京帝国大学医学部もかなりの被害を受けました。しかし各教室の職員の適切な処置により焼失は免がれ，その褒賞金とし，総長から3,000円が薬化学教室に送られ，これが試薬購入の費用に当てられました，以来60余年，同教室で大切に利用，保管されてきました。

今回の寄託に際しては，岡本敏彦名誉教授，首藤紘一教授，阪本秀策先生にご尽力いただきました。

尚，カールバウム社の試薬は，第二次世界大戦前，日本で主流を占めていました。西独の会社でしたが東独に移ったらしく，現在の状態は不明です。

◎道中携帯薬入れ

旅の用心に薬を持ってゆくのは昔も今も同じこと。江戸時代後期の，ちょっとしゃれた薬入れを収蔵しました。5×3cmほどの薬袋が8枚貼りつけられ，折りたたみ式になっています。

◎看板あれこれ

昨年から看板を多数購入。写真の他にも大きな「自由湯」の掛看板，「百毒下し」の置看板なども。これで看板は519点となりました。

寄贈・寄託者の御芳名

上記以外にも，次の方々から貴重な資料・図書をいただきました。

千葉：添川正夫，八木心一

東京：加藤正，木村雄四郎，佐藤清夫，首藤紘一，大和ヘルス財団，田邊普，牧野堅，松林次郎

神奈川：久志本常孝

石川：田中嘉太郎，谷風直人

神井：岩治勇一

愛知：世古口徹，瀧喜義，田崎哲郎，中部大学，安江政一，米津為一郎

奈良：橋爪勝次

京都：清水龍夫，杉立義一

大阪：梅溪昇，国木田誠一，宗田一，田邊源三郎，中沢一郎，長門谷洋治，藤野恒三郎，山名月中

高知：奥山貫司　　（敬称略）

とぴっくす

◎薬用植物園に新コーナーが！

薬用植物園がまた少し変わります。ふれあいコーナーの登場です。

身近に利用している植物を掘ったりかんでみたりすることによって，植物に親しんでください。

受付期間

8月1日～11月30日

午前10時～12時，午後1時～3時(植物園にて受付します。希望者はふれあいコーナー備えつけの呼べルを押し，しばらくお待ち下さい。)

植物によって採取時期が異なりますのでご注意ください。

ステビア　8月～11月。砂糖の300倍の甘さがあります。葉をちぎってかんでみましょう。

サトウキビ　11月。黒砂糖の原料です。茎を切りとってかんでみましょう。

ワタ　10月～11月。実がわれると，ふわふわの綿が出てきます。実をとってちぎってみてください。

ウコン　8月～11月。カレーの色づけに使います。根を掘って色をみてみましょう。

ナンキンマメ　9月～10月。種子から食用油もとります。ちょっと変わった所に実がなります。

◎隣接して話題の植物コーナーもできました。気軽にお越しください。

◎ふるさとわが町ベスト10

中京テレビの上記番組で，羽島郡川島町が取りあげられました。町の名物おじさんや名所に混じって，くすり博物館も登場。アナウンサー氏が不老長寿(？)の薬を飲む一幕も。

◎CBCラジオでもオン・エア

日曜日の朝の番組「もしもし子供相談室」で，青木館長が解答者として登場。「薬」がテーマで，「薬はどうして苦いのか」「飲み薬が何故，腹痛ではなく頭痛に効くのか」など各地から子供の素朴な質問が，多数寄せられました。

◎図書(和漢書)インプット完了

16,000冊におよぶデータが，パソコンにインプットされました。多様な角度から検索が可能で，利用者からの問合わせに早速，活用しています。

館長 **青木允夫**　学芸員 **小山みか子**(編集担当)　司書 **加藤靖子**　庶務 **稲川朋子**
くすり博物館9：00～16：00開館(毎月曜日・12月29日～1月8日　休館)